

第 2 回 斐伊川水系 生態系ネットワークによる 大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会

これまでの取組状況について

- ①生息環境づくり部会準備会の開催報告 P.1
- ②第 1 回検討協議会の開催報告 P.2
- ③「出雲の地域づくりフォーラム」の開催報告 P.3

平成 27 年 10 月 13 日

斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と

共に生きる流域づくり検討協議会（仮称）

生息環境づくり部会（準備会）

議 事 次 第

日 時：平成27年 1月30日（金）
14：00～16：00
場 所：出雲河川事務所 1階 大会議室

1. 開 会（出雲河川事務所・青戸副所長）

2. あいさつ（出雲河川事務所・舛田所長）

3. 議 事

（1）取組の背景について（【資料1】：事務局より説明）

（2）指標種の生息環境としての河川・農地等

における対策について（【資料2】：事務局より説明）

（3）今後のスケジュールについて（【資料3】：事務局より説明）

4. 閉 会（出雲河川事務所・青戸副所長）

＜その他の配付資料＞

- ・ 出席者名簿・配席表
- ・ 参考資料
- ・ 斐伊川水系生態系ネットワークに関するアンケート



【主な意見等】

挨拶

出雲河川事務所 舛田所長 歴史もあり、多様な自然環境に恵まれた流域を、今後も将来に向けて良い状態で引き継いでいこう、もっと良くしていこうといった中で、この地域に携わる皆様と連携をし、どういうやり方が良いかを話し合っていきたいと思う。この取組は、大型水鳥類を指標に考えていくが、鳥を増やそうといった取組ではなく、既に多くの水鳥類が飛来する宍道湖等の水辺環境が失われることがないように、流域でこういった取組ができるかという知恵を出しあっていきたいと思っている。

議事

・指標種の生息環境としての河川・農地等における対策について

出席者 指標種ではないがサギのコロニーやすみかを追っ払うということをやりながら、もう一方で保護していこうという取組の整理についてはどうか。

出席者 島根県では水稻の農業被害が一番多いので、どの程度の被害があるか気になった。

事務局 今飛来している鳥をどう保全していくかと併せて、生態系全体、地域全体としてどういうポイントでバランスをとっていけば良いのかを探っていきたい。豊岡では「コウノトリ “も” すめる環境」を目指しているように、河川や農地等でのバランスをみながら、どういうことができるのかを考えていこうと思う。

出席者 被害などは必ず起こってくることはあるが、全国的に見てこの地域の大型水鳥類は貴重で、売り物にする、上手に利用するという発想を持って、色々な困難を克服していったほうが、地域の産業活性化に貢献すると思っている。これを機会に、課題の対策について知恵を出しあっていけたらと思う。

出席者 豊岡市でも、最初にコウノトリの野生復帰をしようとした時は、害鳥として反対される方が多かったとのこと。利害関係が逆の方達が最初から集まり、ちょっとずつ解決していくと将来、良い斐川平野になると思った。

出席者 島根県では無農薬・減農薬栽培の認証制度を行っているが、すぐに単価に反映させることが難しく、モチベーションの維持も課題として出てきている。その辺もご検討いただければと感じた。

出席者 特に、宍道湖西岸については、湿地で地下水位が高く米以外はあまりつくれないため、基盤整備の要望も入ってきている。基盤整備と環境、大型水鳥類は相反するのではという気がしている。

事務局 基盤整備の整備にあたっては、大型水鳥類の飛来等に配慮・対応していければ良いかと思う。

出席者 トキは国の象徴的な希少種で、出雲にも元々いたという話もあって、野生復帰はシンボリックな取組として、モチベーションを継続させる上では非常に効果的かと思う。

出席者 内水面の会合では、農村集落の下水道から出る塩素が及ぼす微生物やプランクトンへの影響が挙げられている。鳥より下の、食物連鎖の底辺のことも考えなくては、と思う。

・今後のスケジュールについて

出席者 実験的・モデル的な地区をつくれる予定があるのか。

事務局 新規事業を立ち上げてやるというよりは、普段の維持管理の工事でやり方を工夫するところから始めるイメージでいる。整備は早ければ28年度にできるところからやっていければと考えている。

出席者 生息環境調査について、鳥類の飛来や生息を把握されると思うが、餌となるような魚類や両生類といったことはどこまで調べられる予定か。

事務局 今年度は採食地となる水域がどこにあるかを調べている。来年度には定量的な採食生物の調査を予定している。今の枠の中でできる事業についてはパイロット事業のような形で進め、効果も見ながら検討していければ良いものになるかと考えている。

第1回 斐伊川水系 生態系ネットワークによる 大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会

議 事 次 第

日 時：平成 27 年 4 月 28 日（火）
14:00～16:00

場 所：ニューウェルシティ出雲 2F 牡丹

1. 開 会
2. あいさつ
3. 出席者紹介
4. これまでの取組状況について
5. 設立趣旨（案）、規約（案）について
6. 会長の選出
7. 議事
 - （1）取組の背景について
 - （2）指標種の選定について
 - （3）検討体制および今後のスケジュールについて
8. その他
9. 閉会



【主な意見等】

挨拶

出雲河川事務所 舩田所長 この斐伊川水系は、斐伊川本川、そして神戸川、宍道湖、大橋川を通じて中海、境水道までを含めて斐伊川水系である。特に出雲地域にある宍道湖・中海はラムサール登録から今年が 10 年目という節目を迎えている。これに先立ち、斐伊川水系の生態系ネットワークに向けた取組として、これまでトキと共に生きるフォーラムを開催し、昨年度は出雲の地域づくりフォーラムといった取組をはじめ、この準備を進めてきた。そうした中、本日はこれまでの勉強会や取組を踏まえて、いよいよ流域づくりの検討協議会を立ち上げることとなった。この取組は、河川管理者だけでも、行政だけでもできず、この流域に携わる皆様と共に検討し、協議し、進めていくものであると思っている。

議事

・設立趣旨（案）、規約（案）について

出席者 このネットワークの活動対象エリアは、どのあたりまでか。斐伊川水系は、斐伊川から宍道湖・中海にも流れ、放水路から神戸川にも流れる非常に広い範囲にある。

事務局 今回は、出雲平野エリアを対象として議論いただきたいと考えている。西は神戸川、東は宍道湖にいたるまでのエリア。

出席者 水鳥は出雲平野にだけ来る訳ではなく、冒頭のラムサール条約の話も念頭に置き、宍道湖・中海まで範囲を広げて考えると、趣旨により合致した活動として広がっていくと思う。中海・宍道湖の近辺の 5 市の市長会があるので、こちらのネットワークも活用していただき協力できるかと思う。

事務局 水鳥は出雲平野にだけ来る訳ではなく、冒頭のラムサール条約の話も念頭に置き、宍道湖・中海まで範囲を広げて考えると、趣旨により合致した活動として広がっていくと思う。中海・宍道湖の近辺の 5 市の市長会があるので、こちらのネットワークも活用していただき協力できるかと思う。

・指標種の選定について

出席者 今回選定された 5 種は、湿地性の水鳥類の中でも大型のもので、そのほとんどは餌場を水田に求めている鳥。アンブレラ種として、同じようにやれば同じように守れる、また地域の特性が色々つくられ、産業振興にも効果があるかと思う。

出席者 大型水鳥は、あくまでもひとつのシンボルとして理解してよいか。ウミネコが田んぼにたくさん来ているが、こういった鳥たちは排除されるのか。それとも大型水鳥もたくさん飛来する場所にして地域づくりをしていくということか。

出席者 排除ではなく、色々なサギやウミネコも含めて、良い環境の田んぼにはたくさん集まってくる。アンブレラ種として大型水鳥類を守っていけば、その下にいるたくさんの鳥たちが集まってくるということである。ウミネコも潜在的な地域資源であり、田んぼにいるウミネコを出雲では当たり前に見ることができる。観光 PR の中にも組み込むことは良いかと思う。

・今後のスケジュールについて

出席者 生息環境づくり部会では科学的評価を行うことがひとつ、もうひとつはそれに向けて色々な野鳥の会や NPO の方たちがそれぞれのレベルで活動されている。そういった方たちの実績をきちっと報告していただき、どういう運動の広がりがあり、どういう相乗効果や阻害要因があるか、まとめると良いと思う。地域づくり部会では、インバウンドを含めて、最近の外国人は観光名所を巡るのではなく、日本人の当たり前の暮らしを覗いてみたいといった要請がある。漁業や商工会の方などもいるので、ひとつの新しい地域おこしのための内発的な、将来に向かっての構造化を含めながらしっかりと議論を進めることをお願いしたい。

「出雲の地域づくりフォーラム」の開催報告

今年度の地域づくり部会は、市民を対象にした地域づくりフォーラムを下記の通り開催した。

タイトル：出雲の地域づくりフォーラム ―地域の自然で人が潤う―

開催日時：2015年1月31日（土）14：00～16：30

会場：くにびき大ホール（出雲市役所本庁舎）

参加人数：130名

内容：◆開会挨拶

長岡 秀人 出雲市 市長

◆基調講演

「コウノトリと共に生きる ～豊岡の挑戦～」

中貝 宗治 豊岡市 市長

◆話題提供

「大型水鳥類の出雲平野への渡来状況について」

佐藤 仁志 （公財）日本野鳥の会 理事長

◆パネルディスカッション

コーディネーター

関 健志 （公財）日本生態系協会 事務局長

パネリスト

中貝 宗治 豊岡市 市長

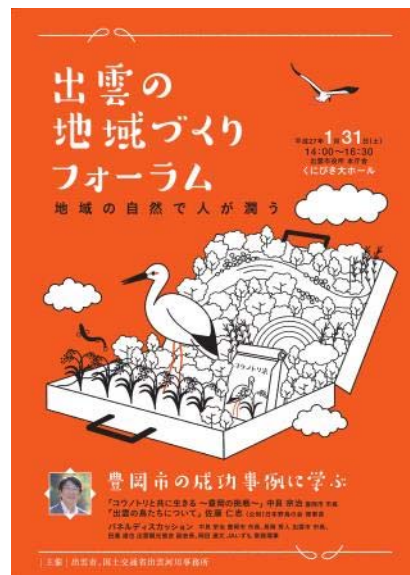
長岡 秀人 出雲市 市長

田邊 達也 出雲観光協会 副会長

岡田 達文 JA いずも 常務理事

◆閉会挨拶

舩田 直樹 出雲河川事務所 所長



開催の報道：（末尾に新聞記事を掲載）

●出雲ケーブルビジョン

- ・平成27年2月4日17：00～ 1時間おきに放送される『いずもキャッチアイ』にて、2～3分程度でニュースとして放送
- ・平成27年2月7～8日に、『いずもキャッチアイ総集編』として、一週間のまとめとして2～3分程度放送

●島根日日新聞（平成27年2月1日 一面）

●山陰中央新報（平成27年2月1日 地域面）

フォーラム要旨

開会挨拶

出雲市 市長 長岡 秀人 氏



皆様こんにちは。

「出雲の地域づくりフォーラム ～地域の自然で人が潤う～」は、私ども出雲市と国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所との共催で開催しております。たくさんの皆様にお越しいただいたこと、感謝申し上げます。

最初にご講演いただく豊岡市の中貝市長、今朝早くから来ていただいてありがとうございます。今回で出雲には3回目の来訪ということで、いろいろなご縁があるなと思います。これからもよろしく願いいたします。

そして、話題提供をいただきます日本野鳥の会佐藤理事長、パネルディスカッションにご参加いただきます出雲観光協会の田邊副会長、JAいずもの岡田常務理事、お忙しい中ありがとうございます。コーディネーターは日本生態系協会の関事務局長にお世話になります。よろしくお願いいたします。

国土交通省の河川においては、これまで、水辺と町の未来創造による水辺の魅力再発見と地域づくり、今年からはミズベリングプロジェクトとしての取組を始めています。川づくりの方では河川全体の自然の営みを視野に入れ、地域の暮らしや伝統、歴史、文化そして野生生物の生息、生息環境、景観等との総合的な調和と創出が行われているところでございます。総合治水対策のほかに農業の活性化や生態系のつながりの再生を具体的に取り組むことで魅力的な地域づくりにつなげようというところでございます。

出雲市においても、これからの川づくりをどうしていくか、その中で地域振興のためにそれをどう活かしていくのかということがこれからの地域づくりの大きな課題となっているところでございます。

ご案内の通り、出雲市は斐伊川・神戸川水系、宍道湖、神西湖などの大型水鳥類の生息環境が豊かに存在しておりまして、出雲地方の生態系ネットワークづくりはこの大きな財産を守りながら、それを魅力的な地域づくりにつなげていく大切な取組であると考えています。日本で4カ所しかないトキの分散飼育地にも選ばれ、その実績も挙げているところでありまして、そういったことも踏まえて、これから市民の皆様の水辺空間に対する考えをしっかりと受け止めながら、地域ごとにそれぞれ特色ある取組を広げていき、水鳥の生息環境の維持と関連付けながら地域づくりにつなげ、広めていけたらと思っています。

本日のフォーラムが出雲の自然と地域をつなげるきっかけとなることを期待しております。お集まりの皆様にも今後変わらずご理解とご協力をお願い申し上げまして、開会に当たってのご挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

基調講演『コウノトリと共に生きる～豊岡の挑戦～』

豊岡市 市長 中貝 宗治 氏



はじめに

豊岡のまちづくりにとって、コウノトリはどのような意味を持つのか。その実例のお話をして、少しでも皆さんの参考になればと思います。

豊岡市は「小さな世界都市を目指す」を掲げています。小さくても世界の中で輝いていることを自らの誇りにつなげ、まちづくりのエネルギーにつなげていこうという戦略です。そのシナリオの主な3つをお話したいと思います。

シナリオ①「受け継いできた大切なものを守り、育て、引き継ぐ」

日本の多くのまちが受け継いできた大切な自然を壊し、歴史や伝統を捨て去り、古い町並みを壊してきました。受け継いできたものをちゃんと守り、新しいことを付け加えて次へと引き渡していく、蓄積をしていく。これはとても有効な道であると思っています。

具体例です。豊岡には城崎温泉があります。1925年、北但大震災で城崎は完全に灰になりました。城崎の復興の基本的考え方は、「元に戻す」でした。洋風建築物で復興することに猛反対をし、木造3階建ての旅館街が復活しました。

外国人宿泊客も昔は1000人前後をうろうろしていましたが、2012年約4700人、2013年約9600人、去年は約14000人にまで増えています。この方たちは、日本を見たいからこそ城崎を訪れます。

グローバル化が急速に進み、世界中が急速に同じ顔になりつつあります。だからこそ、歴史や伝統を守っていく。これがグローバル化の中で輝く有力な戦略であると思っています。



城崎温泉を訪れる外国人観光客

シナリオ②「環境都市豊岡エコバレーを実現する」

豊岡は低湿地帯です。人間が住む上では厄介ですが、この低湿地帯が大好きな豊岡の生き物の代表例がコウノトリです。かつては日本の各地で見られました。しかし、明治時代に狩猟によって数を減らします。第2次世界大戦中に大量の松林が伐採されてねぐらを追われ、最後は戦後の環境破壊によって数を減らしていった、1971年、日本の野生最後の1羽が豊岡で死にました。とどめを指したのは農薬でした。絶



豊岡市を流れる円山川

滅する前の1965年に、飛んでいたコウノトリを鳥かごに入れて人工飼育を開始しました。しかし24年間、1羽の雛もかえりませんでした。転機が1985年に訪れます。ロシアのハバロフスクから6羽のコウノトリが豊岡に送られ、豊岡市職員が懸命に育て、1989年、待望のひなが誕生しました。以来26年連続で雛がかえって、現在95羽が人工飼育され、72羽が再び自由に豊岡の空

を舞っています。長い時間と膨大なエネルギー、たくさんのお金が必要でした。これからもそうだろうと思います。

ではなぜそこまでしてコウノトリを空に帰そうとするのか。狙いは大きく三つあります。

1 つ目は人間とコウノトリの約束を守ろうということです。50 年前、人工飼育を開始し、そしていつか増えたら再び空に帰すことを誓いました。

2 つ目は絶滅寸前の野生生物の保護に関して世界的な貢献をしようというものです。コウノトリは世界中合わせても 3000 羽程度で絶滅寸前の鳥といわれています。

3 つ目はコウノトリも住めるような豊かな自然環境・文化環境をもう一度この地に取り戻そうということです。豊岡の最大の狙いでもあります。

コウノトリが再び自然で暮らすことができるようになるには、湿地の生態系を豊かにする必要があります。ポイントは田んぼ、水路、川そしてそのネットワークです。休耕田を活用して一年中水を張っていただいています。農薬に頼らない「コウノトリ育む農法」も広がってきました。昨年は 293ha でした。中干しの延期もしていただいています。今では抑草効果があることがわかっています。豊かさを増した水田と水路を水田魚道で結び、段差をなくし、そして円山川水系では国土交通省が河川敷の湿地再生を進めています。これまでに新たに 57ha の湿地が創出されています。そして 2007 年 5 月 20 日、日本の野外で 43 年ぶりに雛がかえり、46 年ぶりに巣立っていきました。

野生復帰へ向けて私たちを突き動かしてきた最大の原動力は「命への共感」だと思います。農業をよりやりやすくするために土地改良は不可欠なことです。しかし、自然保護の観点から見るとある意味自然破壊です。だからやめろということではなく、お互いの立場を尊重して、粘り強く説得してコウノトリ育む農法が広がって、自然の豊かさを取り戻していきました。このやわらかな対応が豊岡の得意とするところでございます。

日本海、円山川、城崎温泉、ハチゴロウの戸島湿地、田結を含め、円山川の下流域とその周辺水田が 2012 年 7 月にラムサール条約の登録湿地になりました。豊岡のコウノトリは全国に飛び回っておりまして、島根県、特に出雲によく来ております。

豊岡が新たに開きつつある環境経済戦略。環境と経済が共鳴する状況を環境経済と名付けて、豊岡で広げる努力をしています。狙いは大きく 3 つあります。

1 つ目は「環境行動自体の持続可能性」です。

2 つ目は「地域の自立」です。自分たちの食い扶持は自分たちで稼ぐということです。その有力な分野の一つが環境です。

3 つ目は「誇り」です。もし私たち環境を良くすることによって自分たちの生計を成り立たせていくことができれば、私たちは自らを大いに誇りに思うことができるはずです。誇りはまちづくりのエネルギーになります。



野生復帰が進むコウノトリ

豊岡の工業の少なくとも 11%は、すでに環境で儲けるといふ分野が支えています。

農業もちろん重要です。完全無農薬、75%減農薬タイプどちらも確実に増加してきています。平成 25 年産米は 176 トン売れました。減農薬米は通常のお米よりも店頭価格で 6 ～7 割高く、無農薬タイプでは 10 割以上高く売られています。環境に良い農業をすると農家が儲かるという仕組みが出来てきました。

コウノトリ野生復帰事業の主体は誰か。コウノトリの野生復帰というのは、コウノトリが自然界に定着して自分の力で餌をとり、雛が大きくなって自分の力で餌をとり、また雛をかえす。その状態を安定的に作り出すことです。そのためには環境創造型農業を推進する必要があります。河川や田んぼなどの湿地を豊かにする必要もあります。環境教育・環境学習も不可欠です。持続可能性のためにも環境経済戦略も不可欠です。これは結局人間にとっても素晴らしい環境を作ることにはほかなりません。この責任を持っているのは様々な構成員からなる豊岡という地そのものです。



環境保全型農業に取り組む



売上げが好調なコウノトリ育むお米

シナリオ③「小さな世界都市の市民を育てる」

これまでのコウノトリをめぐる様々な取組によって田んぼに帰ってきたものの中で、私たちが最も誇りに思うものは子供たちです。この子供たちは自分たちのまちでコウノトリの野生復帰が進み、コウノトリ育む農法が広がっていることを学びました。この農法が広がれば広がるほど豊岡の環境が良くなって、人間にとってもコウノトリにとっても素晴らしい環境になることを学びました。

豊岡、出雲のことをよく知っている。だから豊岡、出雲が大好きである。地域の一員として深く根を張る。想像の翼、空想の翼、行動の翼は世界に羽ばたく、これが小さな世界都市の市民だと私は思います。

最後に

やはり「命への共感」なんだろうと思います。豊岡市では「命の共感に満ちたまちづくり条例」を制定しています。人と人、人とほかの生き物。命への共感に満ちたまちをつくりたいと願っています。

神話の地、出雲の空にコウノトリ、トキ、ツルが舞う。そんな光景が実現したらどんなに素敵だろう。そう思います。豊岡の空の下からみなさんにエールをお送りさせていただきます。どうもありがとうございました。

話題提供 『出雲の鳥たちについて』

日本野鳥の会 理事長 佐藤 仁志 氏



はじめに

私は生まれも育ちも出雲市の馬木というところです。月の約半分を東京で日本野鳥の会の仕事をし、半分は地元での活動に充てています。私に与えられた課題が『出雲の鳥たち』とくに大型水鳥類ということです。出雲市と国土交通省が取り組まれようとしている事業が、『大型水鳥類に注目した展開』とお聞きしていますので、少しでもそういったお話が伝わればと思っています。

日本で、世界で唯一の環境、出雲

写真の奥にいる黒いのが天然記念物のマガンです。前方で飛んでいる白い鳥がハクチョウです。さらに手前にいるのがヘラサギです。11羽くらいいます(図1)。図2は少し前に大橋川の河口にいたタンチョウという日本を代表する鶴です。北海道以外で成鳥が二羽来たのは島根しかありません。さらにこの写真にはコウノトリとタンチョウの幼鳥と一緒に写っています。多分、日本で唯一の写真でしょう。

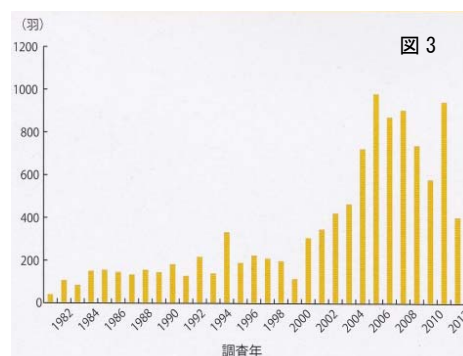


さきほどの中貝市長のお話の中に、「地域のことをよく知って、その潜在能力、ポテンシャルを活かした地域づくり、まち興しをするといいんだよ」とありました。当然のことですし、豊岡市は本当にすごいことをやっていらっしゃいます。だけど、出雲では同じ事はできないし、真似する必要はないけれども、大いに学べると思います。たとえば築地松や、神戸川でやっている四つ手網を使った落ち鮎漁は世界唯一のものというのを地元の人はあまり知らない。もしそういうものがあれば、活用したい、すべきだということをお話したいと思います。

ハクチョウ類について

ハクチョウ達は冬鳥です。冬になるとシベリアから渡ってきます。この出雲平野自体、昔は広大な湿地で、出雲神話の中でもハクチョウとかたくさんでています。宍道湖は日本における南限のハクチョウの湖ですから、そういう意味では、大昔からコハクチョウが来ていたんだろうと思います。

図3にグラフを載せてありますが、ハクチョウはだいたい宍道湖に300羽くらい来ていたのですが、この頃(2000年)から結構増えまして、千羽前後のハクチョウが渡来しています。コハクチョウが中心です。神戸川にも20~30羽以下ですが、改修前は飛来してきて首をつっこんで水草を食べていました。改修工事によってそういった



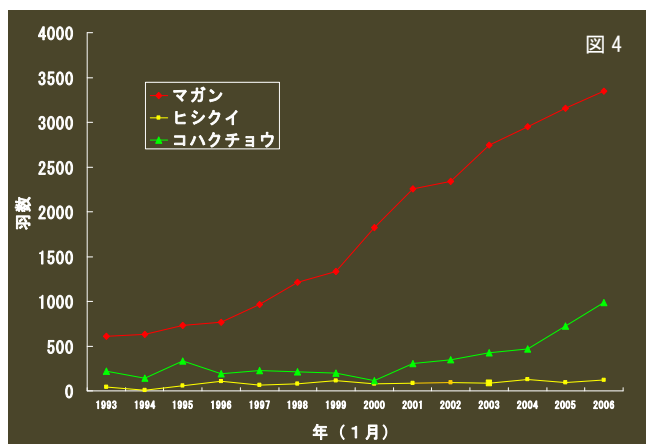
環境が無くなりましたので、今のところはこういったコハクチョウ達も来ていません。

ガン類について

ガン類が斐伊川の河口に、約 3000 羽から 4000 羽きています。ガンの仲間は狩猟の対象として、どんどん捕られています。そこで、慌てて国が天然記念物に指定して守るようになる。その個体が守れるようにはなりましたが、昔は全国各地の田んぼに来ていたガンが今は限られたところにしか来ていない。福井平野から西は斐伊川水系しか集団渡来地になっていない。それも 3000 羽、4000 羽という数のガン類が飛来してくるという状況です。

もう一つ、ヒシクイというガンが出雲にやってきます。ヒシクイというのは、全国的には非常に珍しくて、亜種レベルでの正式な分類ができないくらいです。

(図 4)マガンの曲線、コハクチョウの曲線が右肩上がりなのに対して、ヒシクイは 100 羽前後で増えていません。何故増えないのか、研究者の間でも疑問になっています。



ツル類・コウノトリ・トキについて

ツル類も時々やってきます。豊岡にも来ているというソデグロヅル、クロヅル、こんなの comes ています。コウノトリも大陸から直接くるのが時々来ますし、豊岡で放鳥された鳥も来ます。トキも昭和の初め頃まで隠岐では残っていました。その前の大正時代には斐伊川の方にもいたという記録が残っています。

まとめ

五種以外でも貴重な珍しい鳥がたくさん来ています。ここにはヘラサギなど、バードウォッチャーにとってはものすごく憧れの鳥がたくさん来ます。大型水鳥類ではありませんがカモたちが来て、もぐって餌を食べます。こういった素晴らしい自然は出雲の宝。地域の宝で、守るとともに上手に活用していけたらと思います。

ご静聴ありがとうございました。



パネルディスカッション

パネリスト：

豊岡市 中貝 宗治 市長

出雲市 長岡 秀人市長

出雲観光協会 田邊 達也 副会長

J Aいずも 岡田 達文 常務理事

コーディネーター：

(公財)日本生態系協会

関 健志 事務局長



豊岡市 中貝市長

- ◆コウノトリは豊岡の環境に、質的な意味ですごく役立っている。豊岡のコウノトリを美しいと思うだけでなく、取組自体が多くの方々の共感を呼んでおり、深く人の心を掴む。コウノトリを取り戻すという事は、町に伝統的な城之崎の町並みがあり、原風景があるという事。これ自体が豊岡の深さを与えているというような気がする。
- ◆環境を一生懸命やっている方々の中には、お金と絡めることが非常に嫌らしいとか不純であると考え方がいるが、実際にその環境行動を続けていくことをリアリズムで考えていくと、とにかく味方を増やすことが重要である。お金儲けしか興味が無い方も、儲かるようにして味方につけてしまう。一度この世界に入って自然を見つめ始めると、必ず賢くなる。そこで、ハードルをできるだけ下げるということで豊岡では『環境経済戦略』を策定し、私も「儲けよう」と市民に言っている。
- ◆(コウノトリはもともと害鳥だったのでは？という質問に対して) 本当にコウノトリは苗を踏んでいるのか？を検証する調査を実施した。結果はほとんど踏んでおらず、踏んだ苗はほぼ起き上がっており、収量に影響がなく、コウノトリが田んぼの苗を踏み荒らすというのは迷信だったということが分かった。また、コウノトリ育む農法に取り組んだとたんに、周囲から、「多くの人々がコウノトリと一緒に暮らすことはすごいね！」とほめられて、農家は誇りを取り戻せた。これこそが、コウノトリが害鳥だということを克服した一番大きな要因だったのではないかと私は思う。
- ◆この地がもともと得意としている神話の世界と、さきほどの佐藤さんのお話にあった「いろんな生き物がいるよ」という事は、うまく結びつく新しい売り出し方・盛りつけ方があるのではないかと思います。ぜひそういう挑戦を出雲でしていただきたい。
- ◆豊岡で「育む農法」という無農薬・減農薬農法を進めていった最大の推進力は JA である。JA が乗り出して、この地の有機農業・無農薬・減農薬をサポートする体制ができれば、更に強力に進んでいくのではないかと思います。そういう意味で、JA の役割は大きなものがあると思うので、ぜひ頑張ってください。

出雲市 長岡市長

- ◆出雲市がこれだけ素晴らしい、世界に誇れる環境だということを住んでいるみなさんや、農業者の方も含めて、しっかりと自覚する、それが一番大事だということを教えていただいた。
- ◆いろんな展開の仕方があると思うが、それも含めて、全国で4箇所しか選ばれていない、トキの分散飼育地の一つである出雲、というのが、トキをシンボルとして環境に優しい町だという、市民が共有できる一つの目標のような存在であってほしい。そのためには、分散飼育だけでなく、将来的に出雲の空をトキが飛び、田んぼの中にトキが見られるような、そういう町になってほしいという思いをずっと抱いている。
- ◆具体のものがあって、身近に鳥を感じるようになるというのが一番大事な事だと思う。一万羽を超える鳥にこの出雲の地へ飛来してきてもらっている。神々が十月に出雲に来られるが、鳥も約数ヶ月出雲で過ごす。鳥も出雲の共通のシンボルとしてしっかり守っていく。それを守れるような環境を創っていく。それが私たちの仕事なのではないかと思っている。出雲ならではの貴重な宝、財産をみなさんでしっかり一緒に守っていきたいと、改めて感じたところである。
- ◆歴史と文化をしっかりと守ってきたこの地域で、めぐまれた自然環境をしっかりと後世に伝えていく。それが結果として、出雲全体のブランド力を高めるということが、この地域と将来にとって間違いなく有効な方向性だと信じている。

出雲観光協会市 田邊 副会長

- ◆わずか5年の間に、神門通りの店舗数が20店舗ほどであったのが70店舗になり、観光客の数もそのように(出雲大社の参拝客が800万人を超える)なった。これは、出雲大社、自然環境が育んだ大きな財産であると、今日改めて感じたところである。
- ◆今日を機会に、環境という直接的な観光資源としての取組と、まちづくりのベースとしての環境を、しっかり見極めて頑張って参りたいと思う。

JA いずも 岡田 常務理事

- ◆中貝市長の講演であったように、環境と経済の共鳴をしていき、最終的には農家の手取りが増えていく。これを実証していければ、自ずからこの分野(環境保全)は広がっていくと思う。
- ◆例えば出雲の空をトキが舞うような、環境を重んじた田んぼにドジョウがいたり、いろんなカエルがいたり、そういうような状況が創れるようになれば素晴らしいと思う。
- ◆きちっと実績を積んでいって、「これなら大丈夫だ」というようなものを農協が率先して示していきながら、これからも環境に根付いた農業を展開していきたいと考えている。

(公財)日本生態系協会 関 事務局長(コーディネーター)

- ◆「出雲市トキによるまちづくり構想」に書いてある、究極の最後の目標は、トキが大社の裏の松の木に巣をかける。これは合成写真で、まだまだ遠い先になると思うが、こんな夢のような地域を創れればと願う。



閉会挨拶

出雲河川事務所 所長 舩田 直樹 氏



本日の主催であります出雲市と国土交通省を代表しまして閉会の挨拶とさせていただきます。本日は出雲の地域づくりフォーラムにお集まりいただきまして誠にありがとうございます。また、遠方よりお越しくださいました中貝市長、そして日本野鳥の会の佐藤理事長、パネルディスカッションに参加してくださった皆さん、本当に貴重なお話しをありがとうございました。

このフォーラムは出雲市とわれわれ国土交通省出雲河川事務所の共催です。冒頭の豊岡市長のお話しの中で、豊岡市の取組の中に河川の工事も河川事務所と一緒に、もともと中州の全掘削という計画を半分にしたというようなものがありました。さらりとお話しされていましたが、国土交通省の計画を変更させることにはおそらくものすごいエネルギーが必要だったと思います。しかし、そうやって地元のみなさんが地元を良くしたいという熱意があれば、そのようなことも可能になってくると思います。

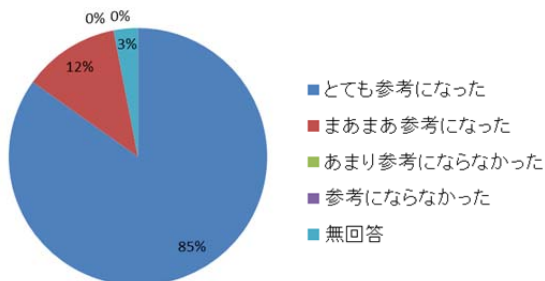
本日のフォーラムは地域づくりの一つのきっかけとして開催していますが、そこに共催という形で国土交通省が参加しております。それは、これまで豊岡市を始め全国で国を動かしてきた取組にならって、最初から国も一緒になって取り組んでいこうという表れでございます。もちろん、国土交通省だけでなく農業では農林水産省、あるいは環境のことでは環境省といった行政があります。しかしそのような行政のしきりは関係なく、地域の熱意があればどの省庁もしっかりと動きます。ですから、地域の熱意を取組にしていくために、ぜひ皆さん一人一人が今日のフォーラムをきっかけに考えていただき、そして一歩踏み出していただいて、出雲市、島根県、国と力を合わせて取組を推進していきたいと思っておりますので、皆様、引き続きよろしくお願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。

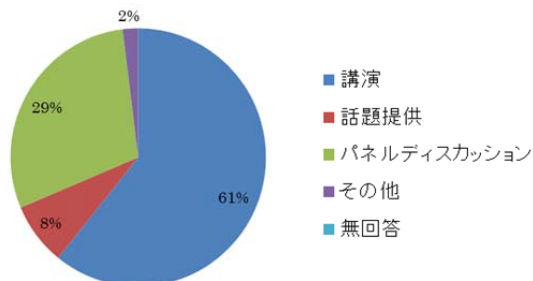
当日アンケート 集計結果

アンケート集計結果 全回答数=33

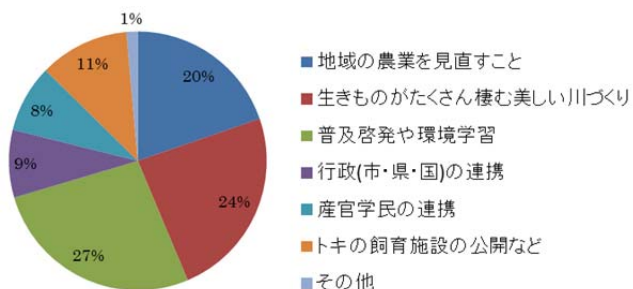
●今日のフォーラムはいかがでしたか？



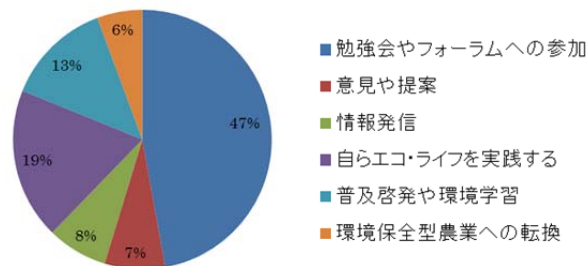
●今日のフォーラムで参考になったことはどんなことでしょうか？



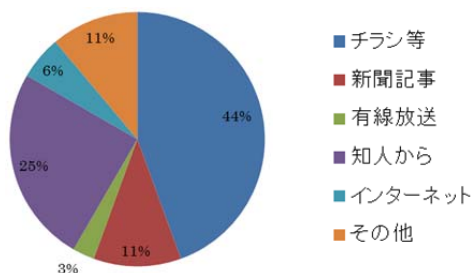
●今後、出雲の地域づくりを進めるためには、どんなことが重要だと思われますか？



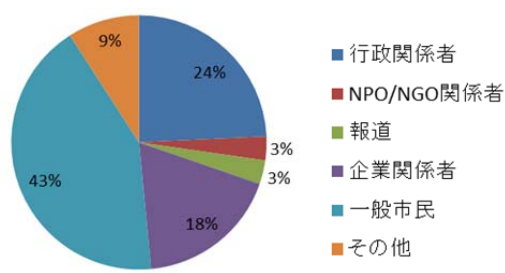
●出雲の地域づくりに、あなたが参加・協力できることはなんですか？



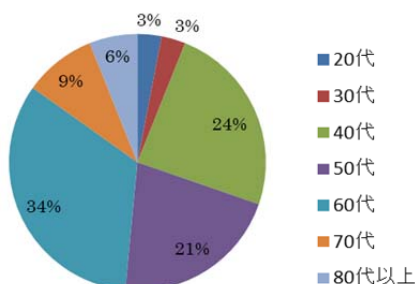
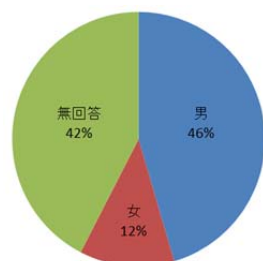
●本日のフォーラムは何でお知りになりましたか？



●所属や立場について



●ご自身について【性別・年代】



・「地域づくりに重要だと思われる項目」については、普及啓発や環境学習が最も多く、市民への周知が不足していると感じる方が多く見られる。

・「自分が参加・協力できること」については、「勉強会・フォーラムへの参加」が半数近くを占めており、その他の自ら実践していく事項については、現状では消極的であるとみられる。このことから、前項の意見も勘案し、今回のようなフォーラムが継続的に続いていくことが望まれる。

●あなたしか知らない『出雲の地域資源』について教えてください

- ・静かなる昔懐かし安らかなまち鷺浦(さぎのうら)
- ・鶴峠(うど)、猪目(いのめ)、宇龍(うりゅう)
- ・菌の長浜、築地松
- ・出雲神楽
- ・玉造温泉
- ・出雲神話
- ・芸術と古い出雲の国の物語
- ・白砂青松の外園海岸・湊原海岸
- ・桃の産地(昔)
- ・山間の自然、清らかな川辺
- ・神西湖のヨシ群
- ・宍道湖の西方にトビの休む島がある
- ・スローライフを好む若者のネットワーク
一時的には出雲市の収入が減る可能性があるかも知れないが、長い目で見ると愛着のある町になり、豊かな町になると思います。
- ・森林資源の上手な活用方法はないものか
- ・トキによる農業、漁業、米もあるが、神西湖のしじみ(出雲平野にトキが住める環境の良さをあらわした特産のしじみ、ウナギなど)
- ・商工会議所が取り組んでいる薬草プロジェクトに大きく発展してほしい
- ・北山のシカを利用した肉、革製品の開発をしてほしい

●その他、ご意見をご自由にご記入ください

- ・豊岡市長のご講演、非常に共感・感動しました。新しい次世代のリーダーだと思います
- ・火災、洪水に見舞われても、時代の流れ、開発にばかりこだわらず、地域の良さ、豊岡市民の声を聴かれ、答えられる形で伝統・文化・地域の良さを保つ豊岡の素晴らしさを知りました。また、その良さを子供たちも感じ、継承されて、素晴らしい地域だと思いました
- ・若くて元気の良い市長さんに感謝します
- ・中貝市長の信念に基づいた市政運営とリーダーシップに感銘しました
- ・豊岡市長の話はとても感動的で涙して聞いた。出雲市も環境にもっと積極的に取り組むべきであると思った
- ・環境経済の6次産業を伸ばすべきだと思った
- ・出雲の食べ物はおいしいし、自然も豊か。個性的な面白い人もたくさんいます(極端ですが)行政が何もしないということが地域の人の活性化、地域づくりの第一歩につながるかもしれません。出雲の若者はそんなに弱くはないと思います
- ・どんなにきれいな言葉を使っても、川辺をコンクリートで固めることには反対です。ダムも観光地にはなり得ません。公共事業でつくるものはどうしてあんなに無粋なものばかりなのでしょう。景観のことは全く考えない人がつくっているのですか？
- ・環境について行政はどのように考えて進んでいこうとしているのでしょうか？ありのままの自然への回帰が必要ではないのでしょうか？水の大切さをもう一度考えてほしい
- ・出雲市は斐伊川水系の下流域にあり、多くが上流からの環境に依存している。上流域を守ることが出雲の発展につながるの、奥出雲との連携が必要である
- ・私がいる神西湖も生態系が崩れており、昔は多種多様な生き物がいたが、今は魚類が減少している実態があり、水と環境に取り組んでいきたい。特に自生のヨシが多く残っており、環境美化を図り、皆さんに楽しんでいただく神西湖にしたい
- ・神戸川の高水敷の環境をよくして、水辺に近づけ、川に入り水遊びができるよう草刈りも行ってもらいたい。斐伊川との合流までは神戸川で泳げた
- ・出雲大社を前面に出し過ぎ。もっと違うPRのしかたもあると思う
- ・トキの飼育施設に関して、実際に身近にふれあう場所がないと市民も実感がわかない
- ・潤いを増すために、出雲の歌を合唱する人が出雲にしかない感性で5〜6人で歌ってくださってもよいと思いました
- ・鳥インフルエンザウイルスの伝播の有無の説明、対処法を説明を理解

・「あなたしか知らない『出雲の地域資源』」については、さまざまなご意見をいただいた。中でも、神西湖のヨシ群などの出雲の素晴らしい自然地や、出雲神楽・神話、出雲の国の物語など、出雲の伝統や神話に関するご意見を多くいただいた。また、森林資源や北山のシカなど、具体的な地域資源の活用についての投げかけをいただいている。

・「その他、ご意見」については、豊岡市の中貝市長の講演について『感銘した』といったような感想が多く寄せられた。また、水辺環境に関するご意見が多く、神西湖の環境改善や、神戸川の高水敷環境を改善し、川遊びができるようにして欲しいなど、自然環境の改善が求められている。

コウノトリと共存へ

出雲フォーラムで環境づくり考察

自然との共生を考える「出雲の地域づくりフォーラム」が31日、出雲市今市町の出雲市役所くにびき大ホールであった。市民約130人が、コウノトリとの共存に向け、環境に優しいまちづくりを進める兵庫県豊岡市の取り組みを通じ、人間と自然に優しい地域づくりの心得を学んだ。

出雲市と国土交通省出雲河川事務所が企画。一度は絶滅した野生のコウノトリの繁殖に1965年から取り組みできた豊岡市で、先

頭に立って活動する中貝宗治市長を講師に招いた。豊岡を含む但馬地方は、湿地を好むコウノトリが多く生息。だが、乱獲や農薬の普及で急速に減少し、71年に豊岡で野生最後の1羽



コウノトリと共に生きるまちづくりの取り組みを語る中貝宗治豊岡市長

が死に、絶滅した。

中貝市長は、市がロシアから導入したコウノトリを増やして2005年に最初に放鳥し、現在の野生固体は72羽に上ることなどを説明。「野生復帰への取り組みは、コウノトリがいる自然環境を、市民が受け入れる文化を取り戻すことが狙いの一つ」と紹介した。

コウノトリが生息できる環境づくりと経済活動が両立する地域を確立するため、無農薬・無化学肥料を中心とした農業「コウノトリを育む農法」などの戦略を紹介。「子どもたちも育む農法を学校で学んでいる」と話し、地域を挙げて取り組み必要性を強調した。

自然保護と経済の関わりは



意見を交わすパネリスト＝1月31日、出雲市役所

出雲の地域づくりフォーラム

兵庫県豊岡市の事例などから、人と自然の共生などについて考える「出雲の地域づくりフォーラム」が1月31日、出雲市役所で開かれ、豊岡市の中貝宗治市長による講演や、パネルディスカッションが行われた。国土交通省出雲河川事務所と出雲市が共催した。

出雲河川事務所が立ち上げ、市も共同参画する「斐伊川水系における生態系ネットワーク」による大型水鳥類と共に生きる流域づくり一検討会の一環として実施した。

江戸時代には日本のいたる所で見られた野生のコウノトリは、1971年に豊岡市を生息地としていた最後の1羽が死亡し、絶滅した。中貝市長は、豊岡市が官民挙げて実施してきた、人工繁殖したコウノトリの野生復帰のための取り組みを紹介。豊岡市は農業や化学肥料の不使用、または削減によって水田の環境を整え、農業だ

けでなく、ほかの企業も廃棄物の減少に努めるなどして、再びコウノトリが空を舞う市になった。合わせて、水田のコメを「コウノトリ育むお米」などのブランドにし、コウノトリツーリズムで観光誘客にもつなげるなど、経済戦略にも役立てたことを話した。

中貝市長は講演の最

豊岡のヨウトリゆに学ぶ

後に、出雲市がトキの分散飼育地であることから、「この出雲の空にトキが舞い、コウノトリが舞えば、どんなに素晴らしいことか。豊岡の地でエールを送っている」と話した。

続いて、日本野鳥の会の佐藤仁志理事長が、出雲平野を訪れる大型水鳥類について説明。ハクチョウガン、ツル類などを取り上げ、中でも、毎年斐伊川に3000から4000羽ほど訪れるガン類は、絶滅の危機にひんしており、出雲平野が西日本唯一の集団渡来地であることなどを紹介した。

パネルディスカッションでは、中貝市長をはじめ、長岡秀人出雲市長、田邊達也出雲観光協会副会長、岡田達文JIAいずも常務理事がパネリストを務めた。ディスカッションで

「環境保護にお金を絡めるのはいやらしい」と考える人も多いが、リアリズムで考えると、味方を増やすことが大事。争うと、保護団体も弱ってしまう」と話した。

環境保護や目標実現のために理想論だけでなく、多くの立場から協力を得て進めることが、実現のカギであることを示した。

農家の協力を得る際も、かつてコウノトリはイネを踏み荒らす害鳥と認識されていたが、調査の結果実際に1羽あたり20株程度しかイネを踏んでおらず、踏まれたイネも自然と起き上がるため、迷信であることを証明。農家も、農業を使わずコメが高く売れるようになり、周囲の感謝により、かつての自信と誇りを取り戻したと話した。

これに対し岡田常務も、農業の視点から、小麦を作るとマガンが新芽を食べに来ることや、落ち穂を食べに野鳥が訪れた経験が披露された。野鳥は、恐ろしいほどだが、追い払う気持ちにはならない。野鳥好きの人も観察してくれる。この良い環境を次の段階に進めるべき」と話し、そのためには生産者の理解が必要と、中貝市長の意見に同調した。環境と経済の共鳴によって農家の手取りが増えることで賛同者が広がること、実践を積み、大丈夫という言葉を農協が示し、実践していきたい」と話した。